

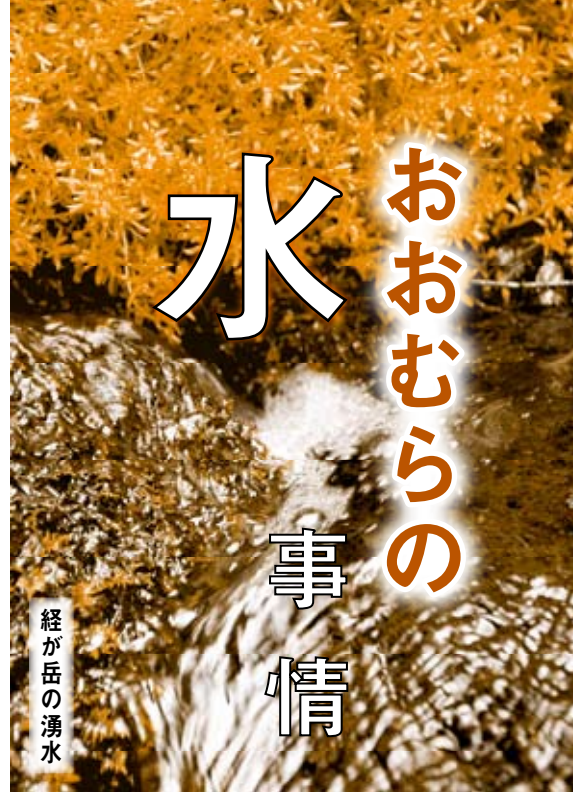
MIZU



MIZU

MIZU

地下水、河川水に代表される水資源は、雨として供給され海に向かう途中、水循環により生み出されています。これらは、生物の命を育み、生活や産業に不可欠なものであるとともに、地球上の限りある重要な資源のひとつです。かつて、大村は多良山系の豊富な降水量と地下水を貯めやすい地層により、地下水・河川水ともに恵まれた地域であり、大村の豊かな水は、市の発展に重要な役割を果たしてきました。



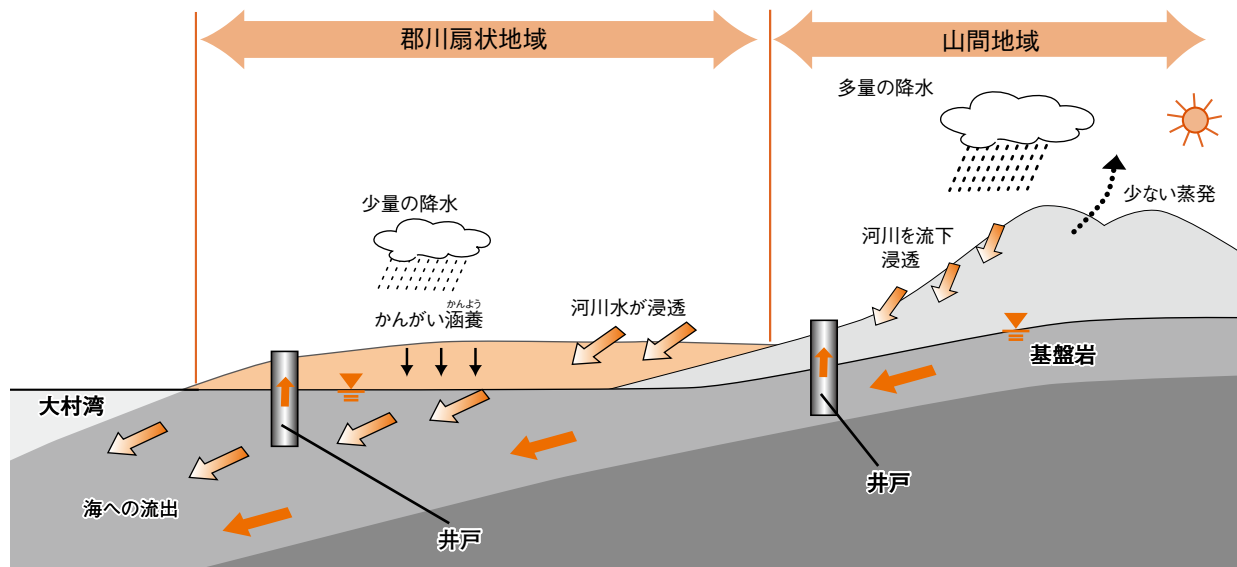
経が岳の湧水



左図のオレンジ色の部分は郡川扇状地といわれ、郡川の水流により山地から運ばれた土砂が堆積してできたものです。ここは地下水をためやすい地域で、大きな水がめの役目をしています。山間地域で降った雨は蒸発する分、河川を流れる分、地下の基盤岩へ浸透する分に分かれます。郡川を流れる河川水は荒瀬橋下流から地下へ入り郡川扇状地の豊かな地下水となり、ゆっくりとした速度で大村湾へと向かいます。

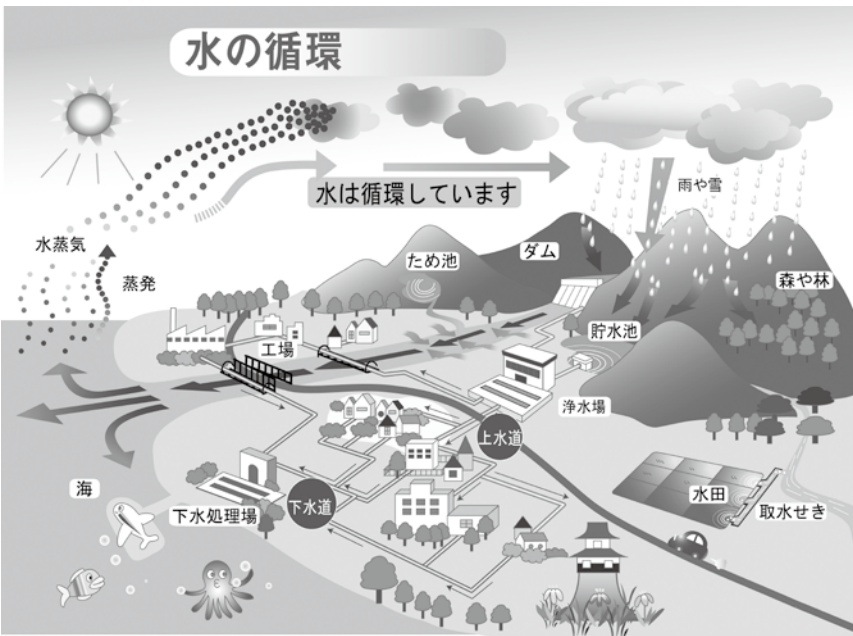


水循環概念図



水資源を用途別に区分すると、生活用水、工業用水、農業用水に分けられます。

水の循環



河川水の利用状況

①取水堰

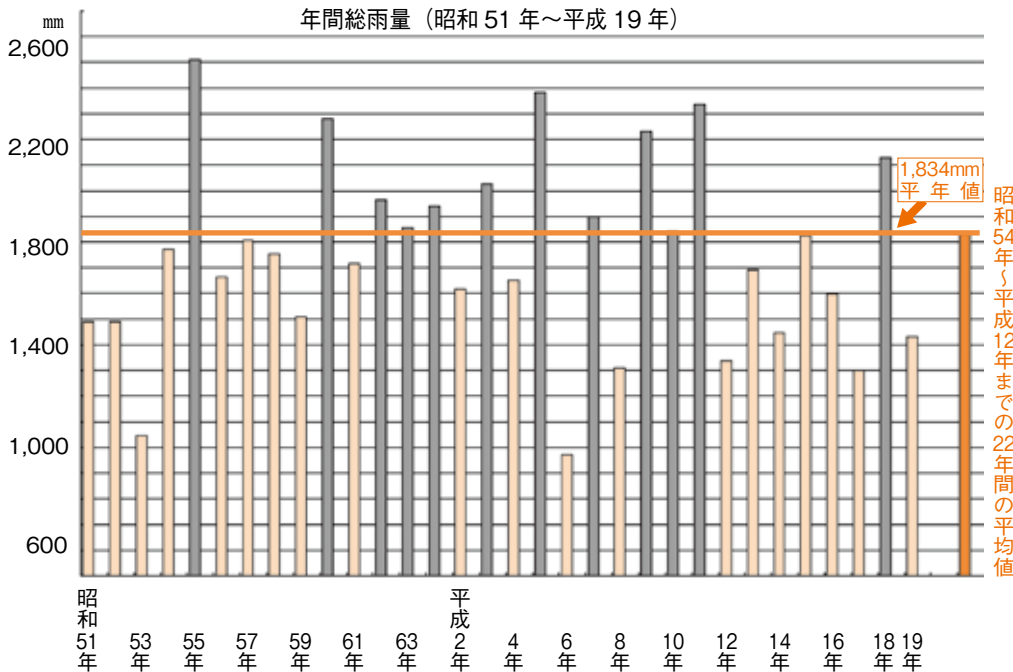
河川水のうち河川表流水は、主に農業用水として利用されています。農業用水は各河川に設けられた取水堰から取水されており、郡川および鈴田川の大規模河川にはそれぞれ約100か所設置されています。

②ダムと貯水池

萱瀬ダムの水は、生活用水と郡川周辺の農業用水に利用されます。萱瀬ダムからは、上水道として1日15,000tを取水しています。そのほか、池田貯水池、葛城貯水池からも取水しています。

③ため池

市内には各地に数多くのため池があります。古くは江戸時代に築造されており、野岳湖を始め、約130か所余りのため池が、地域の農業用水として大きな役割を果たしています。



最近の降水量状況

左グラフは、過去32年間の気象庁長崎空港出張所での降雨量を表しています。長崎空港で測定した市内の年間平均降水量は1,834mmで、オレンジ色で示しています。薄茶色の年は平均値より少なかった年で、32年間のうち20年は平均を下回っています。特に最近では少雨が続き、それがよく解ります。

「節水はダムに代わる水資源」

- ムダな水は使わない
- 水を出しっぱなしにしない
- 水の再利用を考える

「市民一人ひとりがムダな水を使わないことが、ダムをひとつ作ったことになります」

水資源対策室(内線215)



CAUTION